

2026

野焼きの意義

Takakura

美術科として

美術の授業に陶芸を取り入れ、野焼きを行うことは、素材に触れながらものづくりの大切さを学ぶ、意義のある学習である。土は、実際に触れてみることで性質が分かり、形をつくり、火で焼くことで初めて器として完成する素材である。野焼きでは、炎や、灰、温度の変化によって作品の表情が変わり、思い通りならないことも多い。生徒はその体験を通して、自然と向き合いながら表現することの面白さや難しさを学んでいく。また野焼きは、協力して進める活動であり、安全に気を配りながら役割を分担することで、責任感や周囲と関わる姿勢も育まれる。完成した作品だけでなく、制作や焼成の過程での気づきを大切にする野焼きの学習は、表現活動を通して文化や暮らしとのつながりを考える機会となる。



社会科として

名古屋市博物館へ行き、土器の実物を観察させていただいた。いわゆる「土器っぽさ」というか「代名詞的」と言えるであろう縄文土器を数点と、弥生土器においては、高蔵高校との関連性を出すため、「高蔵式土器」の代表的特徴である、円窓のついた赤色の土器を見せていただいた（高蔵式土器とは、以前の高蔵高校の校舎があった付近に広がっていた高蔵遺跡から発掘された土器が、珍しい特徴を持っていたことからつけられた様式の名称である）。どのように文様をつけたかを教わり、色調や質感を自分の目で観察し、手で触って確認した。土器に含まれる砂や石など見ることで、単純な「キレイな粘土」ではないことがわかった。「土器っぽい」とはどういうものかについて、体験できたことは貴重であった。また、考察されている「土器の使い方」や「作成方法」などもうかがうことで、「どうやって複製したら（再現・表現したら）実物に近づけることができるか」のイメージを描くことができた。実物の土器を観察した上で、製品になりそうなもの（道具）を考え、「土器片型箸置き」にいたり、作成を試みた。日本史探究の授業時間を利用して、縄文土器の模様について勉強した。

一言に「縄文」と言っても、多彩な縄目があり、文様はさまざまであることや、実測図を示して器の湾曲の様子なども確認した。麻紐で縄文を撚り、複節の縄を粘土上で転がし文様をつけた。また、爪楊枝で刻み目をいれ、線刻を表現した。

本実践は、土器を題材に社会科と美術科が連携し、学びをより深めることを目的とした取り組みである。社会科で身に付ける、資料を読み取り、意味を考える力は、美術科における表現の発想や構想につながっている。一方、美術科で素材に触れ、形として表す体験は、社会科で学んだ内容を実感を伴って理解する助けとなる。両教科を結び付けることで、生徒は土器を単なる歴史資料や作品としてみるのではなく、人々の暮らしや文化と深く結び付いたものとして捉えるようになる。知ることとつくることを行き来する学習は、知識を表面的に覚えるのではなく、自分の中で考え、理解を深めていく力を育てる。本実践は、教科の枠を超えて学びを広げる、有効な教育の試みである。